世界は大きく変わり始めています。そのひとつが使い捨て社会から循環共生社会への移行です。

世界の先進国が突き進んできた使い捨て社会は、地球資源を食いつくし、地球を温暖化させて、と うとう私たちの子や孫の未来までも使い捨てようとしています。この流れを、資源を再利用し環境へ の負荷をできる限り低減していく循環共生社会に変えていきませんか。すでに多くの自治体で行動が 始まっています。

三豊市も循環共生社会をつくりましょう。

「使い捨て社会」から「循環共生社会」へ流れを変えましょう!

た

してきたのです。 その使い捨て社会は、 のここ40年ほどの間に定着したものです。 使い捨て」や「ごみ」という考え方は、 地球資源を食いつくし、

そして

地

ほ

ш

世界の先進国すべてが 便い捨て社会でした

時代でした。それは日本だけではなく、 捨て、また新しいものを求めるという使い捨ての 大量消費、大量廃棄の時代でした。物を使っては 人類の歴史の中で20世紀の後半紀は、大量生産 世界の先

え方が変わり始めています。 古来の日本文化に しかし今、地球温暖化を契機として、 世界の考 進国すべてが使い捨て社会でした。

使い捨て」は存在しません

使い捨て」「ごみ」、こんな言葉も考え方も、 日

本がはぐくんできた文化の中にはありませんでし

りにしたりと、知恵を絞って、 なく活かしてきました。 割を考えて利用してきました。 物を大切にし、 度紙にすき直したり、 江戸時代に代表されるように、私たちの先祖は ひとつの役割が終わっても次の役 ふすまやびょうぶの下張 徹底して再利用方法を探 物を捨てるのでは 古い手紙を、 もう

菌ちゃんパワー」 を活用しよう

き入っていました。 良い土を作るということに参加者全員が熱心に聞 氏による「元気野菜と人間づくり」講演会が開 動している「大地といのちの会」 されました。 当日は260名もの市民が参加し、 2月11日、豊中町公民館において、 代表の吉田俊道 長崎県で活 生ごみから



豊中町学校給食センターの調理くずをたい肥化 それを肥料にして、こんなに見事な桜が咲きます (不動の滝カントリーパーク)

球を温暖化させて、とうとう私たちの子や孫の未 来までも使い捨てようとしています。 循環共生社会」に変えようではありませんか この流れ

地球の写真は気象庁より提供

です。 はなく、 ものを土の中の微生物菌ちゃんにあげようね」 さくつぶして、「君たちが食べきれなかった ら園児が生ごみを持ってきます。 と教えています。生ごみを土に埋めるので 長崎のある保育園では、 食べ物を土にあげるという考え方 週1回、 それを小 自宅か

ると、人も元気になります くれます。土を元気にし、 物の栄養源になり、それが良い土を作って ります。汚いはずの生ごみは、土中の微生 て菌が食べやすくすると、3日で土にかえ 微生物の力を借りよう!菌ちゃんパワー 微生物も生き物です。生ごみを小さくし 野菜を元気にす

(吉田俊道氏談)

を借りよう!

市内ですでに

やっている人たちがい ます

山本町では、平成8年度から婦人会や地区衛生

取り組んでいます 家庭などで生ご な働きをする微 境にとって有用 組織等がEM (人間や自然環 肥化に を使い、 菌

生物群)

み

の

た

١J

山本町全域に活動が広がっています

辻小学校の取り組みを紹介します



花壇や実習田等で 肥料として使っています



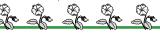
給食の調理くずを EMぼかしでたい肥化



EMぼかし作り



このたい肥を使って育てた花壇のパンジーがきれいに咲いています。(表紙写真参照)





とEMぼかしを混ぜてたい肥化し、花壇、プラン

実習田等に肥料として使っています。

また、辻小学校の児童たちは、

給食の調理くず

ごみ大国」で「資源小国」の日本は

どう変われるか







合わせ発酵させたもの)による生ごみ減量モニタ

「EMぼかし(EM菌を米ぬかともみ殻を混ぜ





けてみてください。

分別が徹底できるかどうか、

家庭から出るものをごみと考えずに、大切に分

日本は資源小国なのに、ごみ大国です。









月平均23㎏の生ごみが減量できました。 毎年の「E

事業 (平成8年度実施)」では、

80世帯で1世帯

Mぼかし作り」には多くの市民が参加しています。





願います。

けてみましょう。

水準が下がるわけではありません。

地球環境の

子や孫の未来のため、

少しの手間と時間をか

少し手間はかかります。

しかし、

私たちの生活

になります。

とごみは減量化し、その多くが再利用できること 市民力が問われます。 これが徹底できればおのず

地球も命も、長く長く受け継がれていくことを

文責 三豊市長 横山忠始

次回は、「三豊市のごみ分別」について取り上げます